

Teaching English Pronunciation in English Language Education —Based on Knowledge of Phonetics—

OKAMOTO Yoshikazu[†]

Abstract

In recent years, English education in Japan has focused on the development of communicative competence and has sought to improve speaking skills. The act of “speaking” begins, as a prerequisite, with the pronunciation of words. Therefore, instruction in the production of words and sentences must also be required. However, there do not seem to be many classes on how to pronounce English or some pronunciation instruction courses for English teachers. Therefore, this study examines how to incorporate as much knowledge of phonetics as possible into pronunciation instruction. First, the description of phonetic instruction in the Courses of Study is explained. Next, the differences between English and Japanese in terms of phonetics are described. Finally, this paper discusses several points at which Japanese learners of English tend to make mistakes, focusing on sounds (vowels and consonants), accents, and rhythms.

Keywords

phonetics, pronunciation instruction, the Courses of Study, sounds, accents, rhythms

英語教育における音声指導 —音声学の知識を基に—

岡本 芳和[†]

キーワード

音声学, 音声指導, 学習指導要領, 音, アクセント, リズム

1. はじめに

近年の日本の英語教育では、コミュニケーション能力の育成に焦点が当てられ、スピーキングの能力を向上させることが求められている。

「話す」という行為は前提として、単語を発音することから始まる。したがって、単語や文を発音するための指導というものも本来であれば求められなければならない。しかしながら、

[†] yokamoto@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

英語の発音の仕方を学ぶ授業や英語教員のための発音指導講習のようなものはそれほどないように思える。英語教員は発音についてどのように指導すればいいのだろうか。

また、英語教職課程では、英語学の分野の中に英語学概論や音声学関連の科目もあり、ここでは英語の音声の仕組みについて学習することが含まれていなければならない。したがって、教職課程履修者はそれについて学ぶことになっている。

そこで、本稿では音声学の知識をできるだけ多く指導に取り入れるにはどうすればよいかを考えてみたい。以下、第2節では学習指導要領における音声指導の記述について説明する。第3節では音声面から見る英語と日本語の違いを説明する。第4節と第5節では日本人英語学習者⁽¹⁾(特に、中学生・高校生)が間違えやすい点などを、音(母音, 子音), アクセント, リズムに絞って議論してみたい。

2. 学習指導要領における音声指導

本節では、音声指導について学習指導要領にどのように記載されているのかを紹介してみたい。まず、『中学校学習指導要領(平成29年公示)解説』の「第2章, 2内容, (1)英語の特徴やきまりに関する事項」の中に「音声」の説明がある。そこには次のようにまとめられている。各項目に簡単な例があれば、それを付け足しておく(ここでは全ての例は引用しない)。

(1) ア 音声

(ア) 現代の標準的な発音

(イ) 語と語の連語による音の変化

There is an apple on the table.

(ウ) 語や句, 文における基本的な強勢

・語における強勢

machine newspaper record(動詞) record(名詞)

(エ) 文における基本的なイントネーション

・orを含む選択疑問文の例

Is this your book ↗ or hers ↘?

(オ) 文における基本的な区切り

(『中学校学習指導要領(平成29年公示)解説 外国語編』の第2章, 2内容, (1), pp. 30-32)

これらはそれほど複雑な事項ではない。実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能として挙げられ、生徒が授業中の言語活動によって身につける音声面に関する技能である。

また、第2章の「3 指導計画の作成と内容の取り扱い, (2)内容の取り扱い」にも音声に関する記述はある。それは次のように記されている。

(2)

音声指導に当たっては、日本語との違いに留意しながら、発音練習などを通して2の(1)のAに示す言語材料を継続して指導するとともに、音声指導の補助として、必要に応じて発音表記を用いて指導することもできることに留意すること。また、発音と綴つづりとを関連付けて指導すること。

(『中学校学習指導要領(平成29年公示)解説 外国語編』の第2章, 3 指導計画の作成と内容の取り扱い, (2), p. 91)

(2)の中に、「日本語との違いに留意しながら」という表現がある。これは英語と日本語の発音の仕方が異なるのでその点を留意しながら指導することを表している。また、発音表記についても音声指導の補助として使用することもできることがわかる。

次に高等学校の学習指導要領について説明してみよう。音声に関する記述に関しては、中学校の学習指導要領と似たような記述は見られる。第2部の第3節の「英語科の目標」には次のように記されている。

(3)

英語の音声や語彙, 表現, 文法, 言語の働きなどの理解を深めるとともに, これらの知識を, 聞くこと, 読むこと, 話すこと, 書くことによる実際のコミュニケーションにおいて, 目的や場面, 状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

(『高等学校学習指導要領(平成30年公示)解説 外国語編』, 第2部, 第1章, 第3節, (1), pp. 156-157)

この説明は前半の知識面と後半の技能面で構成されているが, 前半の知識面のところに音声の理解を深めることが書かれている。つまり, 音声面の指導を行うことを示唆している。

そこで, 英語の特徴やきまりに関する事項の中に「音声」の説明については(1)で示した5つの項目はなく, 「(ア) 語や句, 文における強勢, (イ) 文におけるイントネーション, (ウ) 文における区切り」の3つに留まっている(『高等学校学習指導要領(平成30年公示)解説 外国語編』, 第1部, 第2章, 第2節, pp. 29-31)。また, 音声指導の補助として必要に応じて発音表記を用いることも説明されている(『高等学校学習指導要領(平成30年公示)解説 外国語編』, 第1部, 第3章, 第2節, p. 132)。

本節のまとめとしては, 音声面の指導についても学習指導要領には掲載されており, 教員はそれを授業の中で取り扱わなければならないことがわかる。しかしながら, 具体的にどのようなことに注意して指導するのかについては記されていないので, 現場の教員が工夫をしてその指導を行わなければならないこともわかる。

3. 音声面における日英語の違い

本節では, 音声学の知見から日本語と英語の音声に関する違いについて説明する。その違いのせいで, 日本人英語学習者が英語を発音する

ことが時に困難になっていることがある。教員は本節で説明する事細かな内容や専門の内容を生徒に教える必要はないが, 教員側の知識として知っておくべきことをまとめてみる。

3.1. 音節の仕組み

ここでは, 英語と日本語で音節の構成の仕方が異なっていることを説明する。一般に, 音節とは, 人間がことばを話す時に1つのまとまりと認識している音声の単位のことである。例えば, 日本語の「猫(ねこ)」は/ne-ko/と発音され, 「ね(/ne/)」と「こ(/ko/)」の2つの音節から成っている。一方で, 英語のcatは/'kæt/と発音され, 一つの音節から成っている⁽²⁾。

音節は基本的に母音を中心として構成されるが, その構成の仕方が英語と日本語では異なっている。

(4) 日英語の音節の特徴

a. 日本語の音節構造…CV

b. 英語の音節構造…CVC

C=子音(Consonant), V=母音(Vowel)

日本語の音節は子音が母音の前に生起しており, 母音(「ア」, 「イ」, 「ウ」, 「エ」, 「オ」)と「ン」を除く全ての音が母音で終わる。(4a)が示すように, 母音で終わる音節のことを開音節(open syllable)と呼ぶ。一方, 英語の音節は, 上で挙げた/'kæt/が示すように, 母音の後に子音が生起する。(4b)が示すように, 子音で終わる音節のことを閉音節(closed syllable)と呼ぶ⁽³⁾。具体的に次の例を用いて説明してみよう。

(5) 英語 bag /bæg/ 日本語 バッグ

日本人は「バッグ」というカタカナ表現には慣れ親しんでいると思う。しかしながら, 実際に発音してみると, これらは異なっていることがわかる。特に音節構造に注目して, 最後のgと

「グ」を比べてほしい。英語では母音は残っていないが、日本語では「グ」は/gu/と発音され、母音が残っている（「バッグウ」のように「ウ」の音が多少なりとも残る）。

もう一つ付け加えておきたいことは、(4)を基に考えると、英語では子音が連続することがあるが、日本語ではその可能性はほとんどない。

(6) strength /'streŋkθ/

(6)が示すように、母音の前に子音が3つ、後にも3つ連続していることがわかる。これを発音する場合、「ストレングス (/sutorenɡusu/」のように、全ての子音の後に母音を入れてはならない。

このように、英語においては子音が連続することも教員は意識しておかなければならない。また、指導においては子音が連続する場合は、子音と子音の間に母音を入れないように注意して発音練習をしなければならない⁽⁴⁾。

3.2. カタカナ英語

日本人英語学習者が英語を発音する時に生じる問題の一つに、カタカナ英語（あるいは、ジャパニーズ・イングリッシュ）と言われるものが大きな影響を及ぼしている⁽⁵⁾。カタカナ英語の数を挙げるときりがないが、少なくとも我々日本人は日常生活において、英語、もしくはその他の外国語に由来する多くのカタカナをほぼ毎日使用している。

(7) 日常生活に見られるカタカナとその英語の例

バッグ (bag), ボール (ball), コップ (cup), モール (mall), ボックス (box), マスク (mask), インターネット (internet), スキル (skill) など

日常の習慣から、(7)でリストアップしたような語をカタカナとして発音する癖がついており、それを英語で発音するときどうしてもそれが混ざってしまう、あるいは、カタカナをそのまま発音している傾向にある。

筆者の見解としては、日本人英語学習者がカタカナ英語を使用することは避けては通れないので、カタカナではなく、できるだけ英語の発音らしさに近づけなければならないと考える⁽⁶⁾。また、授業中にカタカナ英語らしき発音で英語を発する生徒が多いのは、発音の指導が少ないからであると考えられる。それゆえ、英語教員たる者は、音声の専門的知識を積極的に学習し、生徒にとって苦痛とならないような音声指導を考えて、行うことを心がけなければならない。

続く第4節から第6節では音声学的な知識を取り入れた音声の指導方法や要点を説明する。また、その内容は、英語教職課程における音声面の指導とも深く関係しているため、英語教職課程履修者にも参考になると思われる。

4. 子音と母音

本節では、日本人英語学習者、特に初中級者（中学生や高校生）がよく間違える音やある音とある音の区別などについて説明する。また、これと並行して、指導上のポイントも述べてみたい。発音においては日本語のカタカナと発音の似ているものもあり、また大きく異なるものもある。それゆえ、英語の発音の説明においては、カタカナとの比較を用いることを断っておく。

4.1. 子音

子音は一般的に①声の有無（有声か無声か）、②調音の位置（口腔のどの部分を使って調音するか）、③調音法（呼気の流れがどのように妨げられるか）の3つの基準によって分類される。

ここでは、学習者が英語を発音しているときによく間違える子音をいくつか取り上げる。「よく間違える」とした理由はその音が日本語訛りが感じられるような音を含んでいるからである。以下、サブセクションのタイトルは発音上ペアになるものとする。また、それぞれの音と関連して注意すべきところがある場合は追加して説明する。

4.1.1. /θ/と/ð/

/θ/（無声歯摩擦音）と/ð/（有声歯摩擦音）の音は日本語にはない音である。まず、これら2つの音の音声指導においては、舌尖を上の前歯の裏に軽く当てた状態で息を出し、後者は声帯を振動させる⁽⁷⁾（竹林・清水・斎藤（2013：34-35））。日本語話者はこれらを「サ行」や「ザ行」で代用して発音する傾向がある。間違えて発音すると意味の異なる語を発音してしまうことがあるので、正確に発音できるように指導したい。

(8) /θ/と/ð/に関する間違いペア

- a. think /'θɪŋk/ sink /'sɪŋk/
- b. path /'pæθ/ pass /'pæs /
- c. breathe /'bri:ð/ breeze /'bri:z /

例えば、正確に発音しないと、“Let’s think!”が“Let’s sink!”や“Let’s シンク!”のように聞こえてしまう⁽⁸⁾。また、日本人は「サンキユウ」とよく言う傾向にあるが、英語の世界ではやはり“Thank you.”であり、thを発音する時の音の出し方には気をつけるようにしなければならない。

4.1.2. /f/と/v/

/f/（無声唇歯摩擦音）と/v/（有声唇歯摩擦音）もまた日本語にはない音声である。発声については、調音器官の使い方は同じで、声帯を振動させるかどうかである。音声指導においては、

上の前歯の先に下唇の内側を軽く当てて、両者の間から息を出し、後者は声帯を振動させる（竹林・清水・斎藤（2013：32-33））。また、/v/の発音を練習する際には、ほんの少しだけゆっくりと長めに音を出すことを付け加えて、指導するとよい。日本人英語学習者は/f/を日本語の「フ」で代用し、/v/を別の子音/b/（両唇をくっつけて発音する）で代用する傾向がある。特に、/v/に関しては誤って発音すると、意味の異なる語になるので注意が必要である。

(9) /f/の例

five /'faɪv/, fast /'fæst/, coffee /'kɔ:fi/,
surface /'sɜ:fəs/ など

(10) /v/と/b/に関する間違いペア

- a. vest /'vest/ best /'best/
- b. vote /'voʊt/ boat /'boʊt/
- c. very /'veri/ berry /'beri/

簡単な単語であるが、fiveは発音の練習には役立つ語で、/f/と/v/が登場する。この語を発音することで、無声音、有声音の区別をさせることもできる。

私の経験上、/f/の音はできても/v/の音ができない学習者が多いように思える。これはやはり/b/の音で代用していることが多いことが考えられる。そして、(11)や(12)が示すように、日本語の中に浸透しているカタカナ語も多く存在しており、これがそのまま英語を使用するときも影響を受けていることが考えられる。

(11) 英語の綴りと発音がvのカタカナ語の例

- a. 「サンキユベリーマツチ！」
- b. 「寒いからベスト着て行ったら？」

(12) 英語の綴りと発音がbのカタカナ語の例

- a. 「これが彼のベストセラー作品ですね」
- b. 「10分後にベル鳴らして」

日本語では「ベ」を使い分けしないため、英語

の発音の際に /v/ と /b/ を使い分けることも慣れていないのである。

最後に、少し余談になるが、日本人英語学習者は日本語を話す時に、「フ (/φu/)」を間違えて /f/ とは発音しない。英語の /f/ の発音を上手にできる人でも日本語を話す時には /f/ とは言わず、「フ (/φu/)」と発音する。例えば、「ふとんで寝た」を「/f/とんで寝た」とは言わない。これは言語習得の過程と何かが関係しているのかもしれないが、筆者にとっては興味深い。

4.1.3. /ʃ/ と /ʒ/

/ʃ/ (無声硬口蓋歯茎摩擦音) と /ʒ/ (有声硬口蓋歯茎摩擦音) はそれぞれ日本語の「シ」と「ジ」に似ている音で、日本人英語学習者は発音する際にはそれほど苦にはなっていないように思える音である。しかし、/ʃ/ は /s/ との区別において注意しなければならない音である。これについては後述する。まず、音声指導についてはやや複雑である。/ʃ/ は舌端が歯茎の後部へ、前舌面は硬口蓋へ向かって近づき、同時に舌全体も盛り上がるようにする。舌と硬口蓋の間のすき間から呼気を出し、前歯に当たるように「シュー」という音を出し、声帯は振動させない。また、日本語の「シ」の子音に近いが、/ʃ/ は唇を丸めて突き出して発音する (竹林・清水・斎藤 (2013 : 40))。一方で、/ʒ/ は声帯を振動させる。

(13) /ʃ/ の例

sheep /'ʃi:p/, show /'ʃoʊ/, special /speʃəl/,
cash /kæʃ/ など

(14) /ʒ/ の例

television /'telə.vɪʒən/, measure /'meɪʒə/,
garage /gə'ra:ʒ/ など

日本人英語学習者にとってはこれら2つの発音は日本語の音に近い部分もあるので練習すれば、習得は比較的簡単で、英語らしく発音でき

るようになる。

ここでもう一つ述べておきたいことは /ʃ/ と /s/ の区別である。こちらの方が日本人学習者にとっては発音が困難となると思われる。このことについて、竹林・清水・斎藤 (2013 : 36) は次のように説明している。

(15)

日本語の「サ行」のうち、「サ」、「ス」、「セ」、「ソ」の子音の発音は英語の /s/ に近い。しかし、「シ」の子音は英語の /s/ ではなく、むしろ /ʃ/ に近い。

(竹林・清水・斎藤 (2013 : 36))

(15) はサ行でもその子音には2種類あり、それらを区別することが必要であることを意味している。英語の発音においては、/s/ を /ʃ/ で発音してしまうと、意味が大きく異なる語になってしまうので注意が必要である。(16) を見てみよう。

(16) /ʃ/ と /s/ に関する間違えペア

- a. sheet /'ʃi:t/ seat /'si:t/
- b. shelf /'ʃelf/ self /'self/
- c. ship /'ʃip/ sip /'sɪp/

また、指導において役立つもう一つの情報は、文字を手がかりに発音する際に、綴りで **sh** となるものは /ʃ/ と発音するということである⁽⁹⁾。

4.1.4. /l/ と /r/

日本人英語学習者にとって /l/ と /r/ の発音の仕方が難しいこと、また、それは音声指導においてもよく特集されているトピックであることはよく知られている⁽¹⁰⁾。/l/ と /r/ は、/f/ と /v/ のような英語の子音の分類上ペアをなさないが、ここではあえて /l/ と /r/ を並記することにする。

音声指導においては、/l/ (有声歯茎側音) は舌尖を歯茎の中央につけて閉鎖をつくるが、舌

の両側または片側を開いていて、呼吸はそこから流出し、声帯を振動させる（竹林・清水・斎藤（2013：54）⁽¹¹⁾）。舌尖を歯茎に当てたまま、「ウー」と言う。一方、/r/（有声後部歯茎接近音）は舌と後部歯茎を接近させ（舌尖を反らせることで、舌尖と上あごの後部歯茎あたりを接近させ）、声が出る通路を狭くし、舌と後部歯茎の間から「ウー」と言う。この際、声帯を振動させる⁽¹²⁾。このように、説明は複雑だが、日本人学習者に教える際に強調しておきたいことは、/r/の発音では舌尖はどこにもつかないことである。

日本人英語学習者は正確な/l/と/r/の発音をすることを苦手としている。これは/l/と/r/は日本語のラ行の音とは異なっているからである。これらは似ているが異なっていることを教えなければならない。/l/については、日本語のラ行よりも舌尖を歯茎にしっかりと、ギリギリまでくっつけているイメージを持たせる。一方、/r/については、舌が完全にくっつかない（ラ行は舌が完全にくっつく）。そして、/l/と/r/の音を誤って発音してしまうと、意味の異なる語になるので注意が必要である。

(17) /l/と/r/に関する間違えペア

- a. lead /'li:d/ read /'ri:d/
- b. lock /'lɔ:k/ rock /'rɔ:k/
- c. alive /ə'laɪv/ arrive /ə'raɪv/
- d. long /'lɔ:ŋ/ wrong /'rɔ:ŋ/

(17)では、短い単語を紹介しているが、このような日常生活でよく使用される語でも正確に発音できるように指導したい。

4.2. 母音

母音は一般的に①前後関係（舌のどの部分が最も高くなるのか）、②高低（舌がどの高さまで上がるか）、③唇の形（唇が丸いか丸くないか）の3つの基準で分類される。注意すべきこ

とは、日本語の母音と英語の母音の発音の仕方は異なっていることである。指導においては、学習者にはまずこのことを意識させなければならない。例えば、日本語の「ア」に聞こえる似たような音は/a/, /æ/, /ʌ/, /ə/がある。これらの4つの英語の母音は「ア」と同じように発音してはいけない。本節では、日本語と英語の母音を照らし合わせて、指導上注意すべき点に絞って、説明してみたい。

4.2.1. /a/, /æ/, /ʌ/, /ə/

これら4つの音は日本語の「ア」と同じではないため、やはり発音の指導においては細心の注意が必要である。以下、それぞれの音について簡単に指導上の注意点をまとめてみる。

/a/（後舌・低・非円唇）は日本語の「ア」よりも舌の位置が後ろよりで口の開きも大きく、やや暗く重い印象の音である（竹林・清水・斎藤（2013：75））。音声指導においては、唇を左右に開かずに、日本語の「ア」よりも口を大きく開け、喉の奥の方から「ア」と発音する。

(18) /a/の単語例

box /'bɔ:ks/, hot /'hɔ:t/, rock /'rɔ:k/ など

また、綴としてはoにこの発音が当てられていることが多い。さらに、wantやwhatのようにw(h)の後にくるaや、qualityやquantityのようにquの後にくるaは/a/の発音になることも知識として知っておくとよい⁽¹³⁾。

/æ/（前舌・低・非円唇）はこの記号が示すように、aとeが繋がっている、あるいは、混ざっているような音である。音声指導においては、「エ」と「ア」の音の間であるため、口を横に広めに開けて、「エ」の口をして「ア」の音を出し、若干長く発音する（長母音ではないが）ことをイメージさせたい。cat/'kæt/は、気持ち/a/を伸ばして、「キヤート」のように発音させる。

(19) /æ/ の単語例

apple /'æpəl/, cap /'kæp/, happy /'hæpi/ など

英語の発音においては、/æ/を/e/で発音してしまうと、意味が大きく異なる語になってしまうので注意が必要である。

(20) /æ/ を /ε/ に関する間違いペア

a. sand /'sænd/ send /'send/

b. bag /'bæg/ beg /'beg/

c. gass /'gæs/ guess /'gɛs/

また、比較しながら、発音させることで両者の音の違いを認識させることもできるので、練習にも使用できるペアである。連続してペアで発音すると、/ε/の音の方がは短く切って発音されることもわかる。

/ʌ/ (後舌・中低・非円唇) は「ア」と「オ」の中間的な感じだが、「ア」よりも舌の位置が高めで後ろ寄りなので、口をあまり開かずにやや奥の方で「ア」と言うつもりで発音する(竹林・清水・斎藤(2013:76))。音声指導においては、前文の説明に加え、短く音を出すことを心がけるように指導するとよい(大袈裟に「アッ」くらいの方がよい)。

(21) /ʌ/ の単語例

rub /'rʌb/, hut /'hʌt/, dull /'dʌl/, wonder /'wʌndə/ など

日本人英語学習者にとって、この音の発音をすることはそれほど難しくないように思えるが、学習において困難なことは、この発音記号(/ʌ/)が一体何を表しているのかわからないことである。これは視覚的にこの記号を見せつつ、発音練習を繰り返すしかない。

/ə/ (中舌・中低・非円唇) はあいまい母音と言われ、専門用語では“schwa (シュワ)”とも呼ばれる。音声指導においては、「ア」の音の

準備をするが、「ア」ほど口は開けず、狭く開け、舌を脱力させて、「ウ」の音をやる気がないように出すとよい。発音の仕方も重要だが、もっと重要なことは、[ə]にはアクセントが置かれないことである。それゆえ、強く発音しないのである。

(20) /ə/ の単語例

about /ə'baʊt/, sofa /'sɒfə/, suppose /sə'pəʊz/ など

/ʌ/と同様に、この/ə/の発音の習得が困難なのは、/ə/の発音記号が読めなくて、文字と音とが結びつかないことである。したがって、この音に関しても一度は視覚的にこの記号を示した上で、発音の練習をすることが重要になる。

4.2.2. /ɪ/ と /i:/

[:]は長音を表す記号である。/ɪ/と/i:/はそれぞれ短母音と長母音であるが、[i:]の音は[i]を単純に伸ばした音ではない。これらを発音する際には、口の開き方や舌の位置が異なっているので注意が必要である。

まず、/ɪ/ (前舌中央より・高・非円唇) は日本語の「イ」と比べてずっとゆるんだ感じの音で、「イ」と「エ」の中間にあるため、日本人の耳には「エ」のように聞こえてしまい、sixをsex, pitをpetと聞き間違えることがある(竹林・清水・斎藤(2013:72))。音声指導においては、「イ」の音とは違うことを意識しつつ、「イ」よりも舌の位置を若干低くし、「イ」と「エ」の中間の音を意識しながら、「エ」の口をして「イ」と発音する。

(21) /ɪ/ の単語例

hit /'hɪt/, fill /'fɪl/, pick /'pɪk/, bit /'bɪt/, live /'lɪv/ など

また、[ɪ]をマスターできていない学習者はfill

が *fell*, *bit* が *bet* に聞こえることがあり, 意味の取り違えを起こしてしまうことがある。

次に, /i:/ (前舌・高・非円唇) は /ɪ/ と比べると日本語の「イ」に近い音で, 「イー」と大体同じでよいが, 唇はもっと横に引く (竹林・清水・斎藤 (2013: 80))。音声指導においては, 唇を強く横に引いて, 「イー」でよいが, その際に舌の位置が /ɪ/ の舌の位置よりも前寄り高い位置にあることを意識させるとよい。

(22) /i:/ の単語例

feel /'fi:l/, *seat* /'si:t/, *leave* /'li:v/, *sleep* /'sli:p/ など

この2つの音はペアで発音練習させると効果的である。その際, 舌の位置と唇の横への引っ張りを意識させるとよい。初歩的なミスでは *live* と *leave*, *sit* と *seat* を間違えることもある。

4.2.3. /ʊ/ と /u:/

このペアもまた /ɪ/ と /i:/ のペアと同じように, 単純に音の長さだけの問題ではない。そして, 日本語の「ウ」とも異なる音の性質を持っている。

まず, /ʊ/ (後舌・中高・円唇) はゆるんだ感じの母音で, 弱い唇の丸めを伴っている (竹林・清水・斎藤 (2013: 78))。音声指導においては, 唇を弱く丸めて少し突き出すようにし, 「オ」の音 (もしくは, 「ウ」と「オ」の間の音) をやや曖昧に出すとよい。また, 日本語の「オ」は唇を丸めて音を出すため, 日本人学習者には /ʊ/ の音が「オ」に聞こえる (響としては「オ」に近い) ことがあるので注意が必要である。

(23) /ʊ/ の単語例

book /'bʊk/, *put* /'pʊt/, *full* /'fʊl/, *could* /'kʊd/ など

次に, /u:/ (後舌・高・円唇) は英語の母音の中で最も唇の丸めが強く, 響きは重く暗い (竹林・清水・斎藤 (2013: 85))。音声指導としては, 意識して, 唇を丸めて前に突き出すようにして, 開口部を小さくし, 日本語の「ウー」を発音する。/ʊ/ とは全く違うことも意識させたい。

(24) /u:/ の単語例

pool /'pu:l/, *fool* /'fu:l/, *food* /'fu:d/, *proof* /'pru:f/ など

これら2つの音も短母音と長母音のペアで練習させるとよい。特にこのペアに関しては他の母音と違って, 唇を丸めて音を出すことをしっかしと意識させたい。

4.2.4. /ɑː/ と /ɔː/ ⁽¹⁴⁾

これら2つの音は複雑で, 正確な発音方法を身につけることと正確に音を聞き分けることが重要になる。日本人英語学習者が苦手とする音のペアである。

まず, /ɑː/ は /ɑ/ に軽く /ɔ/ を添える。「アア」のように聞こえるが, 出発点の母音は「ア」よりも口の開きが大きく, 舌も後ろ寄りなので暗い印象がある (竹林・清水・斎藤 (2013: 99))。音声指導においては, 日本語の「ア」よりも縦に口を大きく開け, 喉の奥の方から「アー」と長めに発音し, つづけて /ɪ/ は, 舌を上アゴに触れない様に奥に丸めて, 付け足す様に発音する。慣れるまでは, ゆっくりと音を出すことをアドバイスするとよい。

(25) /ɑː/ の単語例

car /'kɑː/, *star* /'stɑː/, *arm* /'ɑːm/, *March* /'mɑːtʃ/ など

次に、/ɑː/はアメリカ英語特有の母音で、しばしば「rの音色をした母音」と呼ばれる（竹林・清水・斎藤（2013：86））。この発音は、rの音が混ざっていることもあり、日本人英語学習者にとっては発音がかなり難しい母音である。音声指導としては、唇を少し丸めて「ウー」というつもりで口は広く開けないで準備する。そこから「アー」と音を出し、「ウ」と「ア」を同時に出すイメージを持つ。このように説明はしたが、実際に繰り返し繰り返し練習し、コツをつかむのが習得への近道であろう。

(26) /ɑː/の単語例

girl /'gɜːl/, turn /'tɜːn/, serve /'sɜːv/, earth /'ɜːθ/ など

最後に、これら2つの音を発音する際に、日本人学習者がよく間違える単語を示しておきたい。

(27) /ɑː/と/ɔː/の発音の際に見られる間違い例

- ① heardをhardのように/ɑː/と発音、もしくは、「ハード」と発音する。
- ② birdを「バード」と「アー」を入れて発音する。
- ③ heardとheartの発音がどっちがどっちか混乱する。
- ④ workを/ɑː/の発音で、もしくは、「ワーク」と発音する。

(27)に示したカタカナ語が入るのは、それを日本語としてよく用いているからである（例えば、「ちょっとこの練習ハードすぎる」、「漢字のワークやりましょう（練習用のドリルを意味するワークのこと）」など）。それゆえ、教員は正確な知識を持って、指導できるようにしなければならない。

5. アクセント

アクセントとは単語や句や文の中にある特定の音節に付与される際立った強さ、もしくは、高さのことである。それには、大きく分けて2種類のアクセント、すなわち、強勢アクセント (stress accent) と高低アクセント (pitch accent) が存在する。このアクセントについても、日本語と英語では性質が異なっていることも注意しなければならない。特に教員はその異なる性質を理解した上で、アクセントの指導を行っていくことが必要である。本節では、日英語のアクセントの性質について説明し、次に英語の文レベルでのアクセントについて指導上の観点から必要なことをまとめてみたい。

5.1. 日英語のアクセント

英語は強勢アクセントを持つ言語である。強勢が置かれる音節の母音が強く発音される。一般的に英語の語レベルでのアクセントには2種類、強アクセントと弱アクセントとがあり、さらに前者には第1アクセント (primary accent) と第2アクセント (secondary accent) がある⁽¹⁵⁾。辞書には、第1アクセントは「ˈ」、第2アクセントは「ˋ」の記号が付けられている。例えば、newspaperの発音記号は/n(j)ú:zpeɪpər/と記され、最初の音節が第2アクセント、第2音節が第1アクセントである。

一方、日本語は高低アクセントを持つ言語である。音節と音節の間で音との高低によってアクセントを表す特徴を持っている。英語と違って、音が高い音節が強く発音されることはない。例えば、「雨」は「あ」が高く、「め」が低い。「飴」は「あ」が低く、「め」が高い。日本人であれば、「雨」の「あ」を強く発音して、「あめ」とも言わないし、「あめ（高高）」のように、両方とも高く発音することもしない。

したがって、英語と日本語のアクセントの特徴は異なっているため、教員はこのことを理解し、指導に結びつけなければならない。正確な

英語のアクセントを身につけるには、発音練習、繰り返し、アクセントパターン⁽¹⁶⁾の指導などを取り入れていく地道な訓練が必要であろう。

5.2. アクセントを指導する意義

ここでは、アクセントを指導する（または、学習する）意義について考えてみたい。前節でも述べたが、英語アクセントで重要なことは、音声的にはその部分を強く発音することを理解することである。そういった音声面以外では、次のような利点があると考ええる。

(28) 英語アクセントを指導する利点

- ① 品詞の識別
- ② 意味の区別

まず、①品詞の識別について説明してみたい。これは語アクセントと関係する。語の中にはアクセントの位置によって品詞が変化するものもある。学習者はこのことを習得することにより、それが英語の4技能、特に、リスニングやスピーキングのスキルの向上につながっていくことが考えられる。次の例を見てみよう。

- (29) a. *récord*(名詞) *recórd*(動詞) (= (1)と同じ)
- b. *cóntract* (名詞) *contráct* (動詞)
- c. *íncrease* (名詞) *incréase* (動詞)

(29)で挙げた語は名詞は前に、動詞は後ろにアクセントが置かれる⁽¹⁷⁾。このようなことも知識として学習者に与えることによって、学習の幅が広がっていく。知識を身につけさせることは重要であることは言うまでもないが、(29a)や(29b)のペアに限っては発音の仕方さえも、微妙であるが異なっていることを意識しなければならない。recordについて、名詞であれば、reにアクセントがあり、reは/re/と強く発音される。動詞であれば、reにはアクセン

トがなく、reは/rɪ/となり、明らかに異なる。また、cordの部分にしても名詞では若干伸ばして発音するが、動詞の場合は明確に伸ばして発音する⁽¹⁸⁾。

次に、②意味の区別について説明する。これは句アクセントと複合語アクセントに関係している。句とは2つ以上の語が並んでできたもの（例えば、hot coffeeなど）を表し、複合語とは、2つ（以上）の単語が密接に結びついて1つの語のようにまとまったもの（例えば、blackboardなど）を表す（竹林・清水・斎藤（2013：124-126））。ここからは説明の都合上、前に来る語を第1要素、次に来る語を第2要素と呼ぶ。句アクセントの場合は第1要素、第2要素ともに第1アクセントで発音されるが、複合語の場合は第1要素に第1アクセントが置かれ、第2要素には第2アクセントが付き、また意味も異なってくる。例を見てみよう。

(30) 句と複合語で対になっているペア

句アクセント	複合語アクセント
black board (黒い板)	blackboard (黒板)
green house (緑の家)	greenhouse (温室)
dark room (暗い部屋)	darkroom (暗室)
white house (白い家)	the White House (大統領官邸)

※第1アクセントを太字と下線の両方で示す

(31) 複合語の例

airport, **honeymoon**, **grandfather**, **police station**

(30)と(31)が示すように、複合語ではアクセントは前に置かれる⁽¹⁹⁾。また、そのアクセントの位置で語の意味も変わってくるので、発音練習などでは注意が必要である。

日本人英語学習者にとっては、慣れないうちには聞き取りのレベルでは区別しにくいいため、文字として理解する際、あるいは、語を発音する場合に気をつけていくしかない。例えば、教員

は**grandfather**や**police station**の後ろの語を誤って強く発音してはならない⁽²⁰⁾。また、発音練習を重ねて、身につけていくことが重要で、それによって、音のリズムをつかむことが習得への近道である。

5.3. 英語の文レベルでのアクセント

本節では、英語の文中の語に置かれるアクセントについて考えてみたい。そのアクセントは文アクセント (sentence accent) と呼ばれている。この文アクセントを考える際に重要なキーワードは内容語 (content word) と機能語 (function word) である。内容語は意味内容を伝える語であり、機能語とは内容語に伴って文法的な役割を果たす語のことである。(31)は品詞別にまとめられた内容語と機能語を表している。

(32)

内容語	機能語
名詞, 形容詞, 副詞 動詞, 疑問詞, 指示代名詞, 数詞, 感嘆詞	冠詞, 人称代名詞, 助動詞・be動詞, 前置詞, 接続詞, 関係詞, 不定形容詞

牧野 (2005 : 124) は文中では内容語は基本的に第1アクセント (文アクセント) を受けて語アクセントのパターンをそのまま保ち、一方機能語は基本的に弱アクセントしか受けない⁽²¹⁾と説明している。例外も見られるため、(32)はあくまでも目安と考えた方がよい。教員の立場からすると、文アクセントを受けやすい品詞、それを受けにくい品詞として考えるのが妥当である。一般的な例を見てみよう。実際に音読してみるとよくわかる。

(33)

- a. I went to the park with my brother.
b. I can play the piano.

c. She will leave at seven and arrive at eight.

※下線は内容語

どの例文にも言えることだが、全ての語を一つ一つ強く発音していない。特に日本人英語学習者はcanやwillを素直にそのまま発音し、/ˈkæn/や/ˈwɪl/と発音する傾向にあるが、実際のところ、/kən/や/kn/, / (w) ə/や/l/と発音するのがこの文における自然な英語の発音となる。

文ストレスに関連した内容語と機能語の知識をどこまで学習者に指導するかは様々な意見があるだろう。しかし、教員はこのような知識を持っていなければならない。その知識を持って、教員が正しく文アクセントを適応し、英語を発し、学習者はそれを真似て発すれば、十分な練習にはなる。

正しく英語を発音する、言い換えれば、英語らしさを持って英語を発音することができれば、それが英語特有のリズムを習得することにもつながるため、教員には文アクセントの理解とそれを実践する力が必要となることは明らかである。

5.4. 英語のリズム

前節で文アクセントをうまく習得することによって、英語のリズムの習得にもつながっていくことを述べた。教員、もしくは、教員志望者でなくても、これまでの英語学習の中で英語のリズムはなんとなく身についた感もあるのではないかと思う。本節では、英語のリズムにはどのような特徴があるのかを説明する。学習者の視点から考えると、例えば、CDや動画などの音声を聴いて、真似て練習するということが考えられるが、教員の視点から考えると、やはり知っておくべき知識であると考えられる。

まず、基本的に日本語のリズムと英語のリズムは異なっている。日本語のリズムの基本は音節である⁽²²⁾が、英語のリズムの基本はアクセ

ント(強勢)である。英語のリズムの特徴としては、強アクセントがほぼ等しい時間的な間隔で繰り返される傾向があり、強アクセントに等時性がある。(竹林・斎藤(2008:174), 牧野(2005:133))。これにより、一定のリズムが生まれるのである。次の例を見てみよう。実際に、手でトントンとリズムを取りながら、音読してみるとよくわかる。

(34) 等時性のリズム

Cats eat mice. (3音節)
 The cats will eat the mice. (6音節)
 The cats will have eaten the mice. (8音節)
 (牧野(2005:133))(下線筆者)

(34)が示していることは、音節の数は様々であるが、強音節の数が3つで、同じであるため、文全体の発話時間の長さはほぼ同じになる。つまり、文が長くても、リズムは一定で、強音節以外の弱音節は圧縮されて、短く発音される。もう一つ例を挙げてみたい。

(35) I went to a store to buy a book today.

● ● ● ● ● ● ● ●
 ※・=弱 ●=強を表す

(35)のようにリズムが生まれ、弱く発音するところは音がつながったり、短くなったりする。to a storeのto aは「トゥー、ア」ではなく、「(小さく)タ」のように発音される(次の不定詞のtoも同様)。余談だが、日本人は「わたし

はかいものにいった」という日本語を「わたしはかいものにいった」というようには強弱のリズムでは発声しない。音節ごとに全て強く発声している。このようなことから日本語のリズムとは異なっているため、注意は必要である。

これまで英語を上手に話す、読むことにはリズムが関係していることを説明した。リズムは練習によって、習得していくのが一番で、それが英語のコミュニケーションの中で自然にできるとより英語らしさが生まれてくる。学習者に音読させるときも、教員がうまくリズムを取って、手本を示すことが重要である。

6. まとめ

本稿では、音声学的知識を基にした英語教育における音声指導の在り方について議論をした。日本人英語学習者にとって、英語の音声は母語である日本語と異なる音声体系を持っているため、時に発音することや習得することが困難なことがある。これを解決するためには、英語教員が正しい知識を持って、授業の中で音声を指導することが必要である。母語の干渉については、言語習得を議論する際によく言われることだが、母語の感覚は捨てることはできない。それゆえ、日本語と英語の音声、アクセント、リズムなどの差異を熟知し、学習者に教授をしなければならない。今回は学習者がよく間違えるところの子音・母音を中心に取り上げた。それ以外の音についてはまた別の機会に議論してみたい。

注

- (1) 本稿では日本人英語学習者とは主に中学生、高校生のことをいう。
- (2) 本節では英語の発音記号については国際音声記号(IPA)を用いて表示する。そのため、英和辞典などとの表記とは異なる。
- (3) ここでは、基本的な英語の音節構造を提示し、それが閉音節になることを述べている。もちろん、英語には母音からなる単語も存在する。例えば、a /ə/, eye /'aɪ/, I /'aɪ/, oh /'oʊ/, awe /'ɔ:/などがある(長谷川(編)(2016:70)など参照)。また、sea /'si:/のような開音節も存在する。

- (4) 同様の指摘は、竹林・清水・斎藤 (2013 : 112-113) や真田 (2019 : 41-42) にも見られる。
- (5) カタカナ英語と音声の指導に関する詳しい文献は和田 (2015) を参照してもらいたい。
- (6) この筆者の考え方については相反する意見も存在する。日本語訛りのあるカタカナ英語 (ジャパーニーズイングリッシュ) を World Englishes の一つと考える立場の研究者たちは反対意見を持つかもしれない。また、「英語らしく発音するのがめんどくさく、英語嫌いになる学習者が増える」、「内容が伝われば日本語訛りがある英語でもよい」、「重要なことは伝わること、話す態度であって、発音まで矯正する必要はない」などの意見もあるだろう。
- (7) 舌先を上歯と下歯で軽く噛んで発音するという指導方法もある。筆者が子供の頃はそう習った。これも間違いではないのだが、舌をできるだけ前に出して発音させ、/s/ と区別するための方法として考えられたものだと推測できる。
- (8) 話し手が発話をする状況から区別できると主張する人もいるであろう。筆者はこのような考えを否定するつもりはない。そのように主張する人は「考えよう!」という場面 (コンテキスト) で sink と受け取る人はいないので、日本語訛りがあったとしても問題ないと主張する人たちであろう。ただ最終的に語の意味を認識するのは単語と単語の連結であったり、コンテキストであったりするということは間違いではない。
- (9) これについてはもしかすると例外はあるかもしれない。
- (10) 英語科教育法の授業で、履修者にこれら 2 つの音を正確に発音できるかどうかを試してみたところ、履修者全員が発音する際に意識をして、区別はしていた。しかし、どのように指導するかを尋ねてみたところ、すぐには返答できなかった。つまり、発音の区別は重要だが、教える手法については難しさを感じていることを意味しているのかもしれない。
- (11) 厳密には、/l/ には、「明るい l (clear l)」と「暗い l (dark l)」の 2 種類あるが、本節ではこれらの違いについては説明しない。
- (12) /r/ の音声指導の説明にはいくつかある。よく言われるのが、「そり舌の R」と「盛り上がりの R」である。本稿では前者の説明を紹介した (川原 (2018) 参照)。また、発音方法については、静 (2019 : 110-112) を参考にした。
- (13) 竹林・清水・斎藤 (2013 : 75) を参照。
- (14) これらは辞書や参考書では、[ɑ:r] と [ɔ:r] と表記されることが多い。
- (15) もちろん、音節の数によっては第 2 アクセントがない場合もある (ex. 1 音節の単語)。
- (16) 例えば、ee で終わる語はそこにアクセントがある、tion で終わる語はそこにアクセントがあるなど。
- (17) 日本の英語教育では、これは「名前動後」とよく言われている。
- (18) 真田 (2019 : 45) も似たようなことを指摘している。
- (19) 形容詞、副詞、動詞として使用される複合語は第 1 要素、第 2 要素ともに第 1 アクセントを持っている。第 2 要素の第 1 アクセントのところでピッチが著しく下降するため、第 2 要素の第 1 アクセントの方がやや強く聞こえる (竹林・清水・斎藤 (2013 : 124))。
例) downstairs, secondhand, broadminded, mass-produce など
- (20) **grand father** と両方第 1 アクセントと考えると、全く意味の異なる語になる。これは「祖父」を表さない。
- (21) 基本的にはこれでよいが、例外的に弱めの文アクセントを受ける内容語や文アクセントを受ける機能語の例もある (牧野 (2005 : 130) を参照)。本稿では、文アクセントにおける基本事項だけを取り上げる。
- (22) 竹林・斎藤 (2008 : 174) は日本人は 1 つの音節が V だけ (「絵」/e/) でも、CV (「手」/te/) でも、ほぼ同じ長さで発音し、2 音節は 1 音節の 2 倍、3 音節では 3 倍の長さで発音する傾向があると説明し、日本語には音節に等時性があることを指摘している。「手」は 1 音節であることに対して、「手紙」は 3 音節で 3 倍の長さで発音することを例に挙げている。

引用 (または参考) 文献

- 長谷川瑞穂 (編) (2014) 『はじめての英語学 改訂版』 研究社
- 本間伸輔 (2017) 「教育部英語教育専修における英語音声学についての検討および文法の接点に関する考察」『新潟大学教育学部研究紀要』第 10 巻, 第 1 号, 117-126.
- 今井邦彦 (2019) 『「英語耳」を鍛え「英語舌」を養う』 開拓社
- 神山孝夫 (2019) 『新装版 脱・日本語なまり—英語 (+α) 実践音声学—』 大阪大学出版会
- 川原繁人 (2018) 『ビジュアル音声学』 三省堂
- 牧野武彦 (2005) 『日本人のための英語音声学レッスン』 大修館書店
- 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領』
- 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説：外国語編』
- 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領』
- 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領解説：

外国語編】

真田敬介 (2019) 「英語音声学」の授業内容の考察
—英語教員養成の観点から— 『札幌学院大学
人文学会紀要』 第105号, 33-52.

静哲人 (2019) 『日本語ネイティブが苦手な英語の
音とリズムの聞き方がいちばんよくわかるリス
ニングの教科書』 テイエス企画株式会社

竹林滋・斎藤弘子 (2008) 『新装版 英語音声学入

門』 大修館書店

竹林滋・清水あつ子・斎藤弘子 (2013) 『改訂新版
初級英語音声学』 大修館書店

和田あずさ (2015) 「義務教育段階における英語音
声指導の現状と課題—「カタカナ英語」に着目
して—」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』
第55巻, 417-424.

